

長江翰墨展に寄せて

一九六四年三月

鈴木大拙

心が動けば必ず外に現われて、形となる。形となれば、それぞれの制約を受けなくてはならぬ。制約が出ると、それに囚えられて、本来の心の動いて出るところを忘れる傾きがある。これが人間生活の悩みである。

美しいもの、好いものもこれから出るが、醜いもの、悪しきものも、亦それから出る。分別智慧の要があるのは、この理由によるのである。それで客観的制約を守りて、然かもこれに拘束せられぬのが大切である。

所謂、格に入りて格を出るものである。すべての芸術にこれがある。人間の生活のすべての面においても、これがある。これを忘れぬようにしなくてはならぬ。

書法においても、亦然るべしと信ずる。
乾先生以て如何となす。

豊道春海

長江君は、大正時代書道振興のため、共に盡力した乾淡江大人の令息である。

過日、長江君製作による淡江大人の書法の映画を拝見していたので、同君の作品には、勢から興味をもつていた。

今茲に、長江君の力作を拝見するに、理論的な分析の出来る人で、よい作品を創る人は数少いのだが、長江君はその一人であり、転た、懐旧の情に堪えざるものがある。先大人淡江翁も道山にあつて嚙かし快心の微笑を漏らされて居らるる事と思ふ。

将来の大成を祈り一言蕪辞を呈し賀意を表する次第であります。

南原繁

「書道」と言い「書家」というものが、わが国にいつ頃から出来たか知りませんけれども、その結果、ややもすれば書が諸流派各自の専有物となり、形式主義や模倣主義の弊を生むに至つたことは、否めない事実のごとくであります。故乾淡江先生は書が広く一般庶民のものとなつてゐる中国を範として、自ら流派をつくらず、基礎的な書法を確立しようとしたことは、すこぶる意義あることと思われます。

ここに、長江先生並びにその姉妹方が先考の遺法を継いで、科学的客観的な書法を確立し、それを踏まえて何人も生々とその個性を表現し得る筆の芸術の大眾化を図られることは、ただに書の世界のみならず、わが国の教育界に新風をもたらすものと期待してよいであります。

木下一雄

乾玉江さん(二代玉江)が指導された方の書をわたくしに見せながら、紙のうらをかえして、その書が紙のうらまでとおつてゐるのをほめられた。思わず吃又平の芝居のことが思い出されたのであるが、「書は人の心をえがく」ということのほんとうの意味がわかつたよ
うな気がした。

玉江さんの令兄長江氏の書を見ると清高の二字がよくあてはまる。書家風でない書家の書である。見る人の心がそれにひきこまれる。

本郷新

私にとつて、卅数年来の友人乾さんが初めて個展をひらくという。面白いことになったものだ。昔から典雅、清楚で品のいゝ字を書いていた人だから、この個展は近頃めづらしい個展になると思う。私の父母の墓石に彫られた乾さんの字は、今でも見る毎に美しいなと思ひ、お墓参りには必ず生きている乾さんを思い出すという妙なことになつてゐる。

私は書は好きだが、一向にだめの方である。しかし書への感想はある。戦後読めない字というものが氾濫して、何とかかんとか理窟をつけて騒いでいる人が沢山いるが、あれは恥かしいことだ。外人をだますならいざ知らず、日本人や中国人に読めなかつたり、解せられないものは書とはいえない。フルシチヨフぢやないが、ロバのしつぽで画いた絵と同じで、人間が動物に低下した証據である。絵でも彫刻でも、下地をこしらえる地味な努力をする代りに、世間をあつといわせることに夢中になつてゐる人が多くなつた。これは現代文化の泡沫現象であつて、芸術でも文化でもない。先年中国へ旅

して、多くの古い書に接し、その高い素質にふれ、日本の泡沫書道を思い浮かべ恥しくなつた。

今の日本は、オルソドックスであつたり、古典的であつたりすること自身が軽視され無視されるという変則期にあるのだから、こういう時に、真正面から書を書く人は尊重されねばならないと思う。書が芸術であるためには、芸術であることを否定するところから書き起さねばなるまい。

乾さんの個展の賛をかりて文句をいつたが、これは私の書感で、乾さんにはご迷惑なことかも知れない。

桑沢洋子

乾先生の書を見てみると不思議な魅力にうたれます。純粹なものへのあこがれとでもいうのでしうか。